

「ねえ、桐花ちゃん。何でこんなことになってるかわかってる？」

数人の男に体を押さえつけられている私の前で、司^{つかさ}聖治^{せいじ}は柔らかな笑みを浮かべた。有力者の父親と美人の母親。本人も母親譲りの美貌を持ち、成績優秀でスポーツ万能で、ケチの付け所がない男だと言われていた。しかし司は犯罪行為に手を染めている。それを知った私は密かにその証拠を手に入れ、匿名で告発したのだ。

「おかげで大変なことになるところだったんだから」

「あなたは罪を認めて罰を受けるべきよ」

「罪、ねえ……僕がいったい何をしたら言うんだい？」

「あの薬^{オレシジ}をばら撒いたでしょ！ あれのせいで何人もおかしくなった！」

司は笑みを崩さない。自分が悪いことをしたとは微塵も思っていない顔だ。私は歯噛みした。司が薬を売っていた証拠を見つけて、ようやくこれで彼が法で裁かれ

2
ると思っていたのに。

「僕は彼らが求めたものを提供しただけだよ？ 快楽に溺れて、煩わしいことから解放されたいと願っていたからそうしただけ」

「あなたのせいで何人も廃人になった！ 心は痛まないの？」

「何で心を痛める必要がある？ まあいい。君もすぐに僕が言ってる意味がわかるよ」

司が胸ポケットから細い注射器を取り出した。中には濃いオレンジ色の液体が入っている。私はハツとして後退りしようとしたが、男たちに体を押さえられているためにできなかった。

「これは桐花ちゃんもよく知ってるオレンジの原液。みんなに売ってたのはこれを希釈して錠剤にしてたんだけど」

「っ……離せ！」

「ダメだよ。君は僕を怒らせたんだからね。でも僕は優しいから、君を君が大好き

なみんなと同じにしてあげるよ」

抵抗も虚しく注射器の針が肩に突き刺され、ゆっくりとオレンジの液体が私の体に入り込んでいく。

「さて、君はどれくらい耐えられるのかな？ 最長記録更新できるといいね？」

そう言うと、司は私を押さえている男たちに何かを指示し、部屋を出て行った。

その瞬間にドクン、と大きく鼓動が鳴り響く。体が熱い。頭がぼんやりとしてくる。薬が効き始めたのだろう。呼吸が荒くなった私を見て、男たちが下卑た笑みを漏らす。

「っ、何をするつもり……？？」

「オレンジ使ってんならやることはひとつだろ？」

「離せ！ 私はこんなものに屈したりなんて……っあ！」

3
男の一人が私の右胸を鷲掴みにした。普通なら痛みしか感じないような力だ。しかしそれだけで全身に電流が走ったように感じてしまった。鼓動が早くなる。全身

4
で熱が暴れ回っているようだった。

「さすがに原液はすげえ効き目だな。ちなみに今まで耐えれた最長記録は一日だ。最短は10分だったか？」

「アレは傑作だったよなあ！」

「じゃあ桐花ちゃん、最長記録目指して頑張ろうねえ」

男たちが笑い合いながら私の体に触れる。首筋と腕。ただ指でなぞられるだけの刺激が私には毒だった。

「ん……っ、あ……あ……あ……やめ……ッ」

「まだ序盤なんだからな。こんなんで音を上げてもらっちゃ困るぜ？」

「うる……さい……っ！」

「元気だねえ。それがいつまで続くかな？」

首筋をなぞっていた男の手が、私の服の上から胸を包み込むようにする。それだけで体がびくりと震えてしまい、私は齒噛みした。

「いっぱい楽しもうぜ？ まあ今日は男のモノを挿れるなって司さんから言われているからさ。安心しろよ」

そんな言葉で安心できるわけがない。しかも司の指示だなんて余計に駄目だ。司は人が壊れようとも何とも思わない、むしろ愉しんでいるような人間だ。

「じゃあそろそろ上は脱いでもらおうか」

男は笑いながら私の服をハサミで切り裂く。頭になった下着を見て男たちがニヤニヤと笑った。

「すっげえエロい下着じゃん。なんだっけ、こういうの？」

「ハーネス付きブラジャーだってさ。姉ちゃんがたまに着てる」

「お前の姉ちゃんもエロいな！ 桐花ちゃん、もしかして本当はこういうの期待してた？」

「っ……期待なんてしてない！」

この下着は純粋に私の趣味だ。だれに見せたいわけでもない。ただかっこいい人

になりたくて着ていたのだ。その装飾用の紐を男はハサミで切っていく。

「あ、ちなみにこのブラジャーは没収だからな。司さんから命令されてるんだ」

「なっ、嫌だ……！ 返して！」

私は思わず手を伸ばしたが、男の手がそれを押さえ込む。私の胸を隠すものは何もなくなってしまった。白い肌に男たちの下卑た視線が集まる。

「へえ、桐花ちゃんて結構おっぱい大きいんだねえ」

「っ……」

屈辱に震えていると、男の一人が私の胸を下から優しく揉んだ。びりびりとした感覚が走る。

「薬入れているからこれだけでもすげえ感じるだろ？ この前の女なんかこれだけで泣きながらイッてたからな」

「薬使って女イかせて、威張ってるんじゃない……っ、ああん！」

乳首に指が触れた瞬間に体が跳ねた。しかしその反応を見ているはずなのに、男

は乳輪をなぞるようにするばかりだ。

(だめ……もっと欲しいなんて、そんなこと……)

体はもっと決定的な刺激を求めている。しかしそんなことを口に出せるはずがない。

「何我慢してんだよ？ 本当はもっとして欲しいんだろ？」

「や……そんなこと……」

「桐花ちゃんって強情だなあ。素直になれば気持ちいいこといっぱいしてあげるのに」

「そうだよなあ。司さんが言ってたから今日は下の穴には挿れないけどよ、それ以外のことなら何でもしてやるよ？」

男たちが口々にそう言う。私はキツと男たちを睨みつけた。こんな奴らに屈するわけにはいかないのだ。

「へえ、いいねえ。気の強い女は好きだぜ。でもいつまで続くかな？」

男が胸の先端を摘んだ。それだけで体が痺れた。これまでギリギリのところまで溢

れずに済んでいた快感が一気に襲ってくる。私は堪らず声を上げた。

「あつ、ああああ！」

「イイ声出すじゃん。やっぱり気持ちいいんだろ？ 素直になった方がいいぜ？」

そう言いながら男は私の胸を愛撫し続ける。時折指で弾くようにされるともう駄目だった。

「あ……っ、は……あああ……!!」

「おーすげえ感じてる」

「こっちの方も見ろよ。大洪水だぜ」

別の男が私のスカートをまくり上げた。自分でもわかっていたが、股の部分が湿って下着の色を変えている。私は慌てて足を閉じたが男たちに無理矢理開かされてしまった。男たちが口々に囁し立てる声が聞こえる。私は堪らず叫んだ。

「やだっ！ もうやめて！」

「まだ始まったばかりかだろ？ これからもっと気持ちよくしてやるよ。まあでもこ

「っちは使えねえからな」

男がそう言って、突然私の耳を舐めた。寒気にも似た感覚が背筋を走る。それなのにあり得ないほどに気持ちいい。男は私の反応に気を良くしたのか、舌尖を尖らせて私の耳を丁寧に舐る。

「あ、ツ……ああっ……」

耳に直接響くぴちやぴちやという音に頭がおかしくなりそうになる。けれどここで自我を手放してしまったら司たちの思う壺だ。彼らは何人もをこうやって壊してきたのだろう。そしてその話をしながら笑っている。司たちに対する激しい怒りが私の思考を支えていた。

「耳だけでこんなになるなんて桐花ちゃん、敏感だねえ」

「でもまだ序の口だけ？ 司さんの命令は最長記録更新だからな。もっと気持ちよくしてやるよ」

男たちは一斉に私の体に群がった。一人は乳首に吸い付き、もう一人は逆の胸を

10 揉みながら指先で乳首をつつく。相変わらず耳を舐め続けている男もいる。

「ああっ……やだ、やめ……ッ！」

一人が私の内腿に舌を這わせた。それだけで全身が震えてしまう。体の中心が疼いていた。もっと強い刺激を体が求めてしまっている。

「すげえな。もう下着の上からでもわかるぜ」

内腿を舐めていた男がそう言って笑う。薬の効果と男たちの愛撫で、一度も触れられていないはずのクリトリスが立ってしまった。濡れた下着のクロッチ部分を押し上げているそれに男が指を伸ばす。

「だ、駄目……っ、それは」

「そろそろイかせてやるよ」

「やっ、ああっ……やめ、あ……ッ」

指が下着越しに軽く触れただけなのに、腰が浮くほどの快感が走った。こんな状態で触れられたらどうなるかわからない。それなのに男たちは容赦なく私の体にと

える刺激を強くしていった。

「ッ、あ、いや……あ、あああああっ！」

男に下着越しにクリトリスをつまみ上げられ、私は絶頂した。私から勢いよく溢れ出したものを下着が受け止めきれずに床を濡らしていく。

「すげえ、潮噴いていったぜ」

「っ、はあ……あ……もう、やめて……」

「何言ってるんだよ。まだ一回目だけ？」

男たちは私が果ててからも手を止めてはくれなかった。指先で乳首をこねくり回されるとまた軽い絶頂の波に襲われる。

「や、あ……ああ……」

今度は潮の代わりに尿が漏れ出してしまった。羞恥に顔を染める私を男たちが嘲笑しながら見下ろした。

「そんな顔することねえよ。オレンジには利尿作用もあるって司さんが言ってたか

「そういやこないだの女はもつとすごかったよな」

「ああ、あれな。もう掃除する人が可哀想だったもんな。まあ俺たちがやるわけじゃないし」

「でも掃除する人のことも考えてやれって司さんに言われなかったか？」

男たちが口々に言う。そんな男たちの笑い声がどこか遠くに聞こえ始めていた。

もうどのくらいの間、飄られ続けたのだろうか。私はもはや声を上げることができずにひたすら快感を享受し続けていた。

「やっべ。すげえエロいわ」

男が自分のものを扱きながら言う。私にはもうそれに言い返す力も残ってはいなかった。

「っ、桐花ちゃん。俺もそろそろ出すからさあ」

別の男が私の口に自らのものを突き立てた。喉の奥まで容赦なく突き入れられて呼吸ができなくなる。

「歯立てんなよ？」

「口ん中に出してあげたら？」

「それもいいな。桐花ちゃん、俺の飲んでよ」

そう言つて男は私の中に欲望を放つ。もう何度も男たちに体を弄ばれ続けている私は抵抗する気力もなく、ただそれを受け入れることしかできなかつた。

「っ、げほ……ッ、はあ……」

男が私の中から出て行くと、私は激しく咳き込んで白濁を床に吐き出した。気持ち悪い。こんなものを飲み込めるはずはない。

「全部飲めつったのに」

「いいじゃねえか。何回もやってたらそのうち自分から飲むようになるぜ」

13 「そうそう。それに桐花ちゃん、口の中も感じるみたいだし」

男の一人がそう言って私の胸を再び愛撫し始めた。それだけで私は軽く達してしまふ。

「や、もう触らないで……ッ、あっ……」

「何言ってるんだよ？ まだまだこれからだろ？」

男たちの手が体中を這い回る。そして一人が私の足の間に指を這わせた。その瞬間に体が震える。

「見ろよこれ。濡れまくってマン筋もくつきりだ」

「っ、やだあ……」

男が下着の上から私の秘部をなぞる。それだけで腰が跳ねるような快感が襲ってきた。自分の体が自分のものでなくなっていくような感覚に私は恐怖を覚えた。

「すげえなあこれ」

「俺もう挿れたくなってきたわ」

「それは司さんがダメって言ってるだろ？」

「司さんの命令じゃ仕方ねえよな」

私は気を抜けば自分が自分でなくなってしまうのに耐えるように思考を巡らせた。この男たちは司に従っているようだが、一体何者なのだろう。司より力も強そうだし、年齢もおそらく上だ。それでも彼に従う理由が何かあるのだろうか。

「まあ楽しみはあとにとつとくとするか」

男はそう言いながら、下着に浮かび上がった筋に指をつつ、と走らせた。その瞬間、視界が白く染まって、思考が寸断される。

「あ、あああああっ！」

再び潮を噴いた私を男たちが囁し立てる。そのとき、私たちがいた部屋のドアがノックされた。男の一人が文句を言いながらドアを開ける。

「どうしたんですか、道永みちながさん」

道永と呼ばれた女性はメイド服を着ていた。メイド喫茶などで主流になっている丈の短いものではなく、本格的なものだ。道永はおそらく四十代くらいだと思われる

16
る。本当の使用人なのだろう。司の家なら使用人くらいいてもおかしくない。

「皆様、そろそろお時間です」

「ええーっ、マジかよ。いいところだったのになあ」

「聖治さまに怒られますよ」

「ちっ、しゃーねえな」

男たちは皆不満そうな顔をしていたが、道永に睨まれて大人しく部屋を出て行った。それをぼんやりと見つめていると、不意に道永がこちらを向いた。

「それでは行きましょうか」

「行きましようって……どこに」

「湯浴みでございます。聖治さまのご命令ですので」

司の命令なんて、どうせろくなことはないだろう。私は立ち上がって逃げようとしたが、何度も絶頂したせいなのか体が重くて動かすことができなかった。

「動けないようでございますね。それでは」

道永が手を叩くと、車椅子を押したメイドが二人、部屋に入ってきた。

「……随分と、準備がいいのね……」

「あなたが初めてではありませんので。こうなる前に壊れてしまう人も多くございましたが」

道永が淡々と言う。つまりはこの人も私の味方ではないのだ。二人のメイドに体を支えられ、私は車椅子に乗せられた。

連れて行かれた浴室は、信じられないほど広かった。道永は私を椅子に座らせ、シャワーで私の体についた汚れを洗い流し始めた。

「いい……自分でできる……」

「いいえ、まず体を清めよというご命令ですので」

道永は事務的な手つきで私の体を洗う。先程までの男たちの触り方に比べれば、

17
こちらの方がましだった。

石鹼のいい匂いがする。優しく泡を洗い流され、少しだけ安堵していた私はまだ
気付いていなかった。

この後に、もっと酷いことが待ち受けているということに――。